

# 核兵器廃絶 訴え続け

砺波の医師・金井さん



被爆した父との思い出を語る  
金井さん＝砺波市深江

## 被爆2世の思い 後世に

父親が広島で被爆した小児科医の金井英子さん(62)＝砺波市深江＝は県内の医師らでつくるグループの代表を務め、講演会などを通じて核兵器の廃絶を訴え続けている。1945(昭和20)年8月6日に投下された原子爆弾「Fat Man」は一瞬に

して街を壊滅させ、多くの命を奪った。軍人だった父は直後に広島入りし、惨状を目の当たりにしたが、多くを語らないままに亡くなった。金井さんは「被爆2世としての思いを発信していきたい」と語る。

### 記憶つなぐ

とやま戦後71年

父の故佐々木敏雄さん(富山市水橋大正町)は優しい人だった。電電公社(現NTT)で働き、夏になれば金井さんから家族を毎週のように海水浴に連れて行ってくれた。被爆した事実をさりげなく話してくれたこともあったが、金井さん自身は幼かったためよく

覚えていない。ただ「来る日も来る日も遺体を焼いていた」という言葉は、強く印象に残っている。

詳しくは分からないが、父は軍の一員として投下直後の広島で救護活動に携わり、被爆したようだ。母も差別を恐れていたのか、原爆のことは口にしなかった。毎年8月6日になるとテレビやラジオが広島原爆を扱うが「父と原爆の関わりについては深く考え

ることもなかった」と振り返る。金井さんが中学1年生の時、父は放射線の影響のため脳梗塞で倒れた。まひが残り、話をほとんどしなくなった。

原爆投下は遠い過去の歴史だと思っていたが、金沢大医学部3年のころ、部活動の大会で広島を初めて訪れたことが転機になった。

鉄骨がむき出しの原爆ドームでは原爆のすさまじい威力を肌で感じた。原爆資料館では火の海に包まれ、大やけどを負った人のシオラマを見た。「大変なことがあったん

だ」。想像もしていなかった世界が広がっていた。だが、一緒に訪れた部員が「気持ち悪い。こんな所、早く出ましよう」とせかした。彼女だけではない、こう考える人が世の中に少なくないのかもしれないと思うとショックだった。

1989年に県内の医師らでつくる「核兵器廃絶をめざす県医師・医学者の会」が発足し、2008年からは世話人代表を務めている。毎年夏、被爆した県民に体験を語ってもらったり、戦争に関連した映画を上映するイベントを開

くなど活動が続いている。ことし5月には、オバマ大統領が現職米大統領として初めて広島を訪問し、勇気づけられた。

時は流れ、父が亡くなって30年近くがたつ。71年前を語ることが出来る被爆者は少なくなり、その子どもや孫たちの役割が重要になっている。「大掛かりなことではないかもしれない。それでも1人の医師として、市井の人として、核兵器廃絶に向けた思いを伝えていきたい」と決意を新たにしている。

(社会部・柳田伍絵)

### 広島きょう

### 「原爆の日」

広島は6日、被爆から71年の「原爆の日」を迎え、広島市中区の平和記念公園で午前8時から「原爆死没者慰霊式・平和祈念式」(平和記念式典)が営まれる。

広島市によると、この1年で亡くなった死亡が確認されたりして、原爆死没者名簿に新たに記帳された被爆者は5511人に上り、これまでに記帳された死没者の総数が計30万3195人となった。市は式典で、この名簿を原爆慰霊碑の石室に奉納する。

### ズーム

広島原爆 1945年8月6日午前8時15分、米軍のB29爆撃機が人類史上初めてウラン型原子爆弾を広島市に投下。市中心部にある広島県産業奨励館(現・原爆ドーム)付近の高度約600mで爆発し、強烈な熱線や爆風、放射線により街の広範囲が瞬時に壊滅した。当時の市の人口は約35万人とされ、市は45年末までに約14万人が死亡したと推計している。現在も多くの人が放射線の影響によるがんなどの病気や健康被害に苦しんでいる。被爆者健康手帳を持つ富山県内の被爆者は、今年3月末現在、長崎原爆を含めて60人いる。